

東院堂

東院堂は、8世紀初頭に、元正天皇の母である元明天皇（660～721）の安息を求めて建てられました。国宝であるお堂はもともと寺院群の東側にあったため、その名前が付けられました。1285年に南に面して再建され、1733年に現在と同じように西向きに再建されたが、これは吉兆のためだと考えられます。寺院のお堂の床はしばしば土でできているが、東院堂は木製の床を取り入れています。また、禅瞑想のためにも使用されていたため、いつとき東院禅堂と改名されました。これらの各要因によって、東院堂は日本で現存する最も古い禅堂として知られることになりました。

大講堂のように、6世紀に中国から日本に伝来し、以後寺院建築で使用されている、入母屋造りと呼ばれる建築様式で作られた屋根が特徴です。切妻は通常、建物の核または母屋を保護し、寄棟造は母屋の外側を走る隆起した通路（ヒサシ）を覆います。屋根自体は、本瓦葺として知られる伝統的な瓦張りで覆われており、下向きの半円形の瓦が、平らまたはわずかに上向きのタイルと交互になっています。建物の土台は、洪水や湿気から構造物を保護するために高くなっています。